

# 私と明治学院大学そして文化社会論

松 島 浄

## 1、「社会学研究会」のこと

私が明治学院大学文学部社会学科に入学したのは1960年であった。言うまでもなくこの年は60年安保の年であって、九州の田舎の高校から上京したての、文字通り右も左も解らない新生には、刺戟が強すぎた。当時の明学大は全自連と言ったか、比較的穏健派のグループに属していたので、国会への請願デモに参加するくらいであったが、それでも解散地の八重洲口あたりで警官隊に追われて、ほうほうの体で逃げた記憶がある。

クラスに都立高校卒の2歳年上のMくんという友達がいる、6月の雨の日だったと思うが、夜大学近くの下宿していた私の部屋にやって来て、いまから品川駅に行くと言って、自分が持ち込んだサイホンで珈琲を飲んで、政治的にまだ未熟だった私を誘うこともなく、ひとりで出かけて行った。これが吉本隆明が「擬制の終焉」で書いていた「品川事件」があった夜だったことを私は後で知った。

吉本は書いている。「6月4日、未明、品川駅ホームで、国鉄労組指導部は、すわりこみの学生、労働者、市民の構内広場集会の要請をこばみ、本日のストは国鉄内部の問題でありわれわれは規定通り時限ストをやるから退去してほしいなどという逆立ちした発言をおこない、しまいには三日もねていないから帰してほしいなどという泣きごとさえならべた。これにほろ

りとなった鶴見俊輔・藤田省三らは仲介にはいって、とにかく話し合いを、ということで全学連指導部を説得した。全学連指導部もまたここで、運動の主体性をたもつことができず、そのためらいを学者・文化人の仲介にゆだねた。さよう、闘争の現場に着流してやって来た是々非々主義のイデオログに局面をゆだねたのである。」(吉本隆明『擬制の終焉』現代思潮社、1962年)

これが2歳年上の友人が雨の夜に私の下宿から出かけて行った品川闘争の真相であった。そのころの私はといえば慣れない東京での一人暮らしと大学生活への適応で精いっぱいであった。そんな中でただひとつ自分から積極的に行動したことがあった。それが「社会学研究会」への入部である。それというのも高校時代から批評的な本を読むのが好きだったこともあり、社会学科に入学することが決まったと同時にさっそく社会学の本を捜したのである。当時清水幾太郎の「社会学入門」という新書が出ており、田舎の本屋で買ってまずこれを読んだのが社会学という名のつく最初の本だった。コントの切手が表紙になった本であった。当時すでに有斐閣から『社会学辞典』やパーソンズやマーソンの分厚い翻訳本もでていたと思う。新入生がそんな本を購入しても読みこなせるはずもなく、やがて小遣い銭に困って古本屋に売ってしまった。

それにしても単純な学生だったわけで、社会学科に入学したからにはクラブ活動も社会学研究会に入ると、誰にも相談することもなく、当時グリーンホールの地下にあった部室に行き入りしたのである。入ってみると同級生が10人以上いて、それからは大学にいくとまず部室に顔をだすという生活が始まった。当時の部長はのちに独協医科大学で医療ケースワークを専門にすることになる斎藤安弘さんで先輩にはのちに神奈川県副知事になる室谷千英さんなどがいた。このクラブは名前は社会学研究会であったがメンバーの半数は社会福祉に関心をもつ学生であった。

主な活動は毎年の夏休みを利用した「農村実態調査」を実施することであった。何故かこのテーマがこのクラブの伝統的な研究課題になっていたのである。顧問は館先生や渡辺栄先生であったから専任の農村社会学の先生がいたわけではないのに、このテーマが継承されていたのはおそらく実証的な研究対象としては最も取り組みやすいだろうという顧問の先生からのアドバイスがあったのかもしれない。当時非常勤で山梨大学から来ていた服部治則先生には調査対象地から調査方法まで大変お世話になった。先生は夏休みの合宿調査にも参加してご指導いただいた。ちなみに当時参考にした本は鈴木栄太郎や福武直の農村実態調査の方法論が多く、有賀喜左衛門まで手をのばす学生はあまりいなかったと思う。対象地は私が1年生の時は三重県の山村、2年目は青森県の津軽半島の漁村、3年目は八王子の近郊村、4年目は長野県の山村だったと思う。いずれも当時の学内学会誌『社会学と福祉学』に調査報告が掲載されている。それを見た大橋薫先生から学生の調査報告としてはなかなか良く出来ているとほめられたこともあった。学生ながらもプリテスト、サンプリング、調査票の作成、面接調査、集計、報

告書作成まで一通りのことはやっていたのでいい勉強になったことは事実である。

社会学の勉強会のテキストで憶えているのは清水幾太郎の『社会心理学』などである。他には松下圭一の『現代政治の条件』などが魅力的なテキストだった。1960年代には他にも社研、新聞会、SCA、BBS、児童問題研究会などいわゆる学術系と呼ばれたクラブがいくつかあったが、そのいくつかは大学闘争の時につぶれてしまったのである。社会学研究会もその例外ではなかった。つまり政治党派のオルグに遭ったわけで、政治と文化の問題を乗り切れなかったということであろう。

## 2、「新明正道ゼミ」のこと

ところでその後私は三年のゼミ選択の時に「新明正道ゼミ」を選んだことで、先生の「総合社会学」に出会うことになる。もちろん私は不勉強だったから、先生の理論社会学をさっぱり継承できなかったけれど、先生の社会学の幅広さと奥行きのはつきり感じ取っていたと思う。とくに先生が『社会本質論』で展開していた「行為関連の立場」から見た、社会生活の構造関連図式は私にとっても社会学の体系を理解する時の重要な理論になっていた。先生は「行為の意味」のところで、「人間的行為の分類」を次のようにカテゴリー化している。

- 1、生活遂行的行為（下構）
  - 種属的行為
  - 経済的行為（技術的行為）
- 2、生活構成的行為（中構）
  - 伝達的行為
  - 教育的行為
  - 道徳的行為
  - 政治的行為（法律的行為）
- 3、生活表現的行為（上構）
  - 宗教的行為

学問的行為（魔術的行為）

芸術的行為

娯楽的行為

（新明正道『社会本質論』弘文堂書房）

私は、この分類は1942年のものであるが、いまだに新鮮な魅力にあふれていると思っている。まず重層化された社会構造論の幅広さと立体的なダイナミズムである。しかもいわゆる社会学の対象領域がほぼ包括されていることである。種属的行為という概念の時代性が気になるならば「家族的行為」に置き換えれば、いまでも充分通用する社会学の体系であると思われる。

それとこの分類を見て気づくことは、先生の社会学のルーツである。一つはマルクスの階級的社會論で、下部構造を根底において、中間構造として、いわゆる形式的な社会学の領域を位置づけ、その上に上部構造を構想しているところである。もう一つは先生の社会的行為論のことで、これはあきらかにウェーバーの影響である。つまり生活構造論はマルクスに置いて、それを関連づける行為関連の立場はウェーバーを援用していたのである。先生の総合社会学は社会生活の対象領域の広さとともに、研究方法の深さの意味も含んでいたと思われる。つまり社会と個人のまさに総合的な把握である。先生のこの総合社会学が私の文化社会論にも影響をあたえていることは言うまでもない。社会学の永遠の課題である社会と個人をいかに統合し止揚するかという問題である。

### 3、「吉本隆明」のこと

最後に私の文化社会論を語る時に避けて通れない批評家がいる。吉本隆明である。新明先生もかつて批評家の小林秀雄と論争をしかかったことがあった。これは私自身一度検討してみたかったテーマの一つであったが、ついに手がつ

けられなかったのは残念であった。私が吉本隆明の批評を読み始めたのは大学院に入ってからであった。その当時の痕跡が残っているので紹介してみたい。それは吉本隆明の『自立の思想的拠点』（1966年）が出た翌年に日本読書新聞が行っていた「読書ノート」という書評である。その時の課題図書の一つが『自立の思想的視点』だったのである。いまその私の書評の一部を引用してみたい。

「かつて長田弘は吉本の詩の世界をくぼくの不幸は風景に鎖のようにつながれている」といった詩句にふれながら、＜風景にたいする憎悪の倫理＞を透視してみせたことがある。ところで最新作＜告知する歌＞でもその＜風景＞というコトバは四連の初めに一つ使われている。＜我々はその名を呼べばかならず傷つく／その土地の奥深くには奇怪な儀式がある／もし風景が解放しなかったら魂を穴居させ／たれも出口をみつけない／＞そして私はいま、吉本にとって風景とはなにか？と問うことによって、長田弘がふれなかった吉本思想の存在論的核につき当たるのだ。

吉本にとって風景とはいうまでもなく偉大で卑小だった戦争とナショナリズムの季節である。あるいは暗く、明るい平和とナショナリズムの季節と言い換えても同じことだ。戦争時であろうと、アメリカから解放されようと、このナショナリズムというくらくもえている風景は少しも変らない。だから日本のナショナリズムはそれ自身を内側から解放していく以外に方法はない。＜どんな可能もぼくたちの視ている風景のほかからやっこない＞のだ。」

（松島浄「拒絶の論理が武器」『日本読書新聞』1967年6月）

こんな調子の書評だったのであるが、編集部が付けたタイトルは「拒絶の論理が武器」という勇ましいものだった。選者は映画評論家の小

川徹だった。当時私も愛読していた雑誌「映画芸術」の編集長で映画の裏目読み批評の名手だった。こうして吉本隆明の批評を本格的に読み始めると、私はすっかり彼の文体の魅力の虜になってしまい、あらためて初期の評論集を読んだりした。聖書を解説した「マチウ書試論」や「芥川龍之介の死」「日本近代詩の源流」「文学の上部構造的性」「芸術の大衆化論の否定」などほとんどすべての批評を夢中になって読んでいたということである。「芸術大衆化論の否定」を下敷きにして「日本新聞学会」でディスコミュニケーションのテーマで研究発表したり、「マスイメージ論」を読んで「日本社会学会」でポストモダン文化論の研究発表をしたこともあった。かなり難解な『マスイメージ論』を大学院生と読んでいたら、院生のひとりから「吉本隆明の発想が水が滲み透るように解るんですね」と感心されたこともあった。

しかし吉本隆明のモチーフを再認識させられたのは恥ずかしながら最近のことで、『日本語のゆくえ』(2008年)で「芸術的価値の問題」という東工大での講義録を読んだ時である。初期の「文学的表現について」とか『言語にとって

美とは何か』などで展開していた芸術言語論の意義があらためて理解できたと思った。私は彼の「指示表出」と「自己表出」の概念とその図式を勝手に翻訳して「集合表象」と「内蔵感覚」などと言い直して、利用していたのに、肝心なところはしっかりつかんでいなかったのである。私はこの座標軸を使って横軸に「社会的意味」を縦軸に「個人的価値」を位置づけて、あらゆる文化作品を社会学的に立体的かつ構造的に分析できると思っていたからである。そしていまその方法論がやはり有効であることが再確認できたことをうれしく思っている。最近私は文学を含めた芸術作品の意味と価値を過不足なく読解できるようになった。その点で大きな読み間違いがなくなったし、読みの自信がついて来たと思っている。その意味でも吉本隆明を永年読んで来た甲斐があったと思う。あらためて吉本隆明にも感謝したい気持ちである。

最後に、この間明治学院大学と学生を含めた社会学部の皆さんに大変お世話になった。心から感謝申し上げる次第である。いまはただ最後の秋学期の講義を納得できるかたちで終わることができればと思っている。皆さんありがとう。